

絵師宗達が『平家納経』 「清盛公願文」 附属文書 「 櫛筆」 の謎を解く

| | |
|-----|---|
| 著者 | 林 進 |
| 雑誌名 | 阡陵 : 関西大学博物館彙報 |
| 巻 | 54 |
| ページ | 6-7 |
| 発行年 | 2007-03-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/00023972 |

絵師宗達が『平家納経』「清盛公願文」 附属文書「櫛筆」の謎を解く

林 進

平安時代末期の長寛元年（1163）に、思いもかけず従二位、権中納言、兼皇太后宮権大夫という高位の位階、官職に昇った平清盛（1118 - 81）は、その報謝の意味をこめて安芸国宮島の伊都岐島神（女神）の御利生に対する法華経の供養を思い立った。家督重盛や弟の経盛、教盛、頼盛ら一門の人たち、家僕あわせて三十二人が『法華経』（一品経）二十八巻、『無量義経』一卷、『観普賢経』一卷、『阿弥陀経』一卷、『般若心経』一卷を分担、書写し、『清盛公願文』一卷を添え、あわせて三十三巻を『金銀荘雲龍文銅製経箱』一合に納め、長寛2年（1164）9月に巖島神社宝殿に安置した。この善美を尽くした王朝の美しい装飾経は、現在、国宝『平家納経』と呼ばれる。

その後、桃山時代に『平家納経』は安芸・備後守となった福島正則（1561 - 1624）によって修復が加えられ、新造の外箱『蔦文蒔絵唐櫃』に納められ、慶長7年（1602）5月に巖島神社に再び奉納された。この慶長期の修理の際、『法華経』二十八品のうち「化城喻品」「囑累品」そして「清盛公願文」それぞれの表紙絵・見返絵、あわせて六件が新たに制作された。

その金銀泥・着彩による絵画表現の特色から、補作を行ったのは、京の絵師宗達（生没年不詳）ではないかと推定されている。この「宗達」説はかつて明治・大正期の美術蒐集家原富太郎、益田孝、複製作家田中親美らによって唱えられ、現在肯定されるに至った。また、慶

長11年（1606）に京の豪商で能書家角倉素庵（1571 - 1632）によって書写された観世流謡本『藍染川』（大和文華館蔵、写真1）は雲母刷り文様の装飾料紙の上に金銀泥の肉筆で「鶴」「若松」「薄」などが描かれており、それを描いたのは素庵と親交のあった宗達と推定される。この金銀泥による描写の特徴、雲母刷り文様の形が『平家納経』補作の表紙絵・見返絵（写真4・3）のそれに通じるものがあることから、その説は首肯される。

当時、補作に当たった宗達は、『平家納経』の荘厳の在り方を調べ、とくに「授記品」の表紙絵・見返絵における金の洲浜形と銀の洲浜形の対比の妙趣、つまり朝夕二度の満潮時に現れる洲浜を表裏同形で表すという斬新な意匠に注目した。彼はこれにヒントを得て「化城喻品」では、表紙には浜松と洲流し、見返しには満ち潮と槇の磯山を描き、「囑累品」では、表紙には散る梅花、見返しには満ち潮と槇のある磯辺、雲を描いている。彼は『平家物語』の主題である「栄枯盛衰」すなわち「無常観」を表紙の表裏でもって表し、清盛をはじめとする平家一門と、保元の乱（1156年7月）に敗れ讃岐国に配流され不幸な最期をとげた崇徳院（1119 - 64）への追善の意味を新補の絵に込めた。

「願文」の本紙（5枚の斐紙）を巻き終った第1紙裏面の左端側には手垢による黒い汚れが認められる。本来「願文」に表紙が付いていれば、このような黒いしみは生じない。とすれば、慶長の修理の際、「願文」を保護するために新たに表紙が取り付けられたとしか考えられない。

新補の表紙（写真4）には金銀泥による「靡く薄」と金泥による「横筋の雲」が描かれ、晩秋落日の薄の原を表す。その見返し（写真3）には早春の山麓で「若草」を喰む身籠の「雌鹿」が金泥で描かれ、その鹿の半円の形は、山際から昇る「朝日」を見立てたものである。金銀泥・微塵による「雲」は雨を降らし生き物を育てることを暗示する。

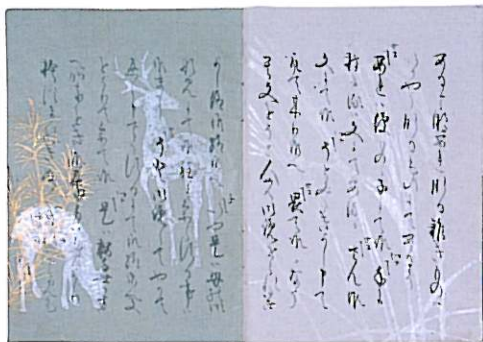


写真1 観世流謡本『藍染川』慶長11年書写



写真2 「櫛筆」文書



写真3 「平家納経」願文見返絵



写真4 「平家納経」願文表紙絵

その表紙絵と見返絵は「死」と「生」を象徴的に表したもので、仏教の「無常」を意味する。また四季の「秋」と厳島神社のある「安芸」、「鹿原・麓原」と平家一門の邸宅があった「六波羅（六原）」という同音異義の言葉の修辞法、「掛詞」が使われている。

見返しに「鹿」を描いた理由としては、厳島に生息する「神鹿」を意図したにちがいないが、また修理時に清盛自筆の文書「櫛筆、仁安元年十一月十八日、内大臣平朝臣清盛」（写真2）が発見され、そのこととも関係する。この「櫛筆」文書は金銀砂子、小切箔散らしの装飾料紙に書かれたもので、その際、見返し（表紙）と願文本紙との間に挿入して、改めて卷子装にされた。

この「櫛筆」とは一体、何を意味するのか。その謎解きには、今まで多くの人々がいろいろの説を提示した。たとえば「報賽目録の断簡」（亀田孜氏）、「崇徳院の怨霊を退散させるための呪術の言葉」（小松茂美氏）などがある。

「櫛筆」文書が書かれた七日前、仁安元年（1166）十一月十一日に清盛は内大臣に昇任された。彼は二度目の厳島の神への報謝として面白い趣向を思い付いた。それは、二年前の『平家納経』の書写に用いた「鹿の巻筆」（写経や願文の書写にこの筆が用いられた）を「櫛笥」（くしげ）の中に「櫛」のように並べ置き奉納することであった。それは清盛一人の見立て遊びであった。美しい装飾料紙に書かれた「櫛筆」文書はその「奉納目録」である。その後、その「筆」と「櫛笥」は失われたが、幸い清盛が書いたその「奉納目録」一通は長い年月、理

解されないままに『平家納経』に添えられて伝存したのである。

最初に「櫛筆」の謎を解いたのは、じつは宗達その人である。彼は「櫛筆」の意味を理解し、見返しに「鹿」を描き、「櫛筆」文書と合せたのである。それには根拠がある。

崇徳院の実弟である後白河法皇（1127 - 92）の御撰にかかる『梁塵秘抄』の法文歌の中に「峯に起き臥す鹿だにも、仏に成ることいと易し、己れが上毛を整へ筆に結び、一乗妙法書いたなる功德に（山の峰の辺りに住む鹿でさえも、成仏することができる。それは決して難しいことではない。自分の身の上毛を揃え束ねて筆を作り、ありがたい法華経を書き写したその功德によって、まちがいなく成仏できるからである）」という今様がある。すなわち、鹿も筆の功德で成仏できるという。宗達はその法文歌から鹿毛筆の供養を思い付いた。かつて清盛が行った趣向を見抜いたのである。

宗達が鴨東の清水坂辺り、葬送の地である鳥辺山の麓の「六原（ろくはら）」に居住していたことについては、藤本宗舟（素庵の友人）・角倉平次（素庵の次男）宛の『角倉与一（素庵）書状』（個人蔵）によってわかる。無名の絵師宗達が『平家納経』の補作を依頼された理由は、おそらく、かつて清盛の「六波羅第」があった同じ土地に彼が住んでいたからではなかったか。すでに色紙、短冊、扇面などの料紙装飾に異才があった宗達を福島正則に推薦したのは、おそらく宗達の知己である素庵であったと、私は推理している。